

Title	竹取物語試攷：人間無力觀の文學
Author(s)	長谷川，信好
Citation	大阪外国語大学学報. 3 p.41-p.48
Issue Date	1955-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80106
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

竹取物語試攷 — 人間無力觀の文學

長 谷 川 信 好

The Taketori Monogatari Considered as a Literary Expression of Human Powerlessness

Nobuyosi HASEGAWA

RESUMÉ

Of the tales of *Taketori* and *Ise*, two of the oldest narratives in the history of Japanese literature, the former is traditionally held to be “at the fountain-head of story-telling in Japan.” Concerning this Tales of Taketori (*Taketori Monogatari*) there are, generally speaking, two schools of thought: one looks upon it as a novel of manners and society, while the other regards it as a fairy tale pure and simple. These conflicting views have each their justifications, but the aim of this short treatise is to suggest a third way of looking at the story.

According to this last viewpoint *Taketori Monogatari* is a tragedy in the widest sense of the word in that it is a literary expression of the powerlessness of mankind.

This powerlessness is envisaged in terms of the physical capacity of humanity and social implications do not yet come into the picture. The fact that the conflicts, contradictions and discrepancies of human existence are portrayed in their physical aspect quite apart from their relation to the social order, may be deemed proof of the simple and primitive nature of this narrative. The absence of any profound catastrophe may also be ascribed to the same cause.

This is in striking contrast with the Tale of Genji (*Genji Monogatari*) in which social momentum is most strongly emphasized. This explains the complex and profound nature of the latter as a tragedy, which ensures its full development as a story. Conversely, it may be suggested that in the *Taketori Monogatari* there already existed a germ which held out a promise for the development of Japanese story-telling into an expression of *mono-no-aware*, or the “Ah-ness of things.” In this sense it is perhaps fair to say that the Tale of Genji partakes more in the nature of the *Taketori Monogatari* than of the *Ise Monogatari*. May it not be suggested that the authoress of the *Tale of Genji* had this idea in her mind when she referred to the *Taketori Monogatari*, rather than to the *Ise Monogatari*, as lying “at the fountain-head of story-telling in Japan”?

竹取物語といへば必ず伊勢物語といふ風につねに「竹取伊勢」と並べ稱せられることが從來からの習慣のやうになつてゐる。これは平安朝に入つて新しく現出した物語文學の二つの系統をそれぞれ代表するものとして考へられるからであつて、すなはち竹取物語は傳奇物語の、そして伊勢物語は歌物語の源流として、たとへば高木市之助氏の言葉をかりていへば、^①「一方に竹取物語的なものと他方に伊勢物語的なものと、この兩者が或はそのままの情態で、或はそれ自身成長しつつ、相互に融合し構成し、さうして終には變質し、分解し、枯死して行つた」物語史上の二つの大きい系統を意味したからであつて、源氏物語なども、この二つが合流したところに表はれた作品であつたのである。したがつて、源氏物語「繪合」の巻において「物語のいできはじめの祖なる竹取の翁」と紫式部が書いてゐるのも、その意味から正しい。

ところで、その一方の系統を示めず竹取物語について、從來二つの見方が、しかも對立的な見方が行はれてゐる。その一つは竹取を^②「戀にうき身をやつす當時の大宮人を寫した一篇の世態小説である」と見るもので、他はこれを^③「ただお伽噺として」考へようとする見解で、前者は津田左右吉博士、後者は和辻哲郎博士によつて、それぞれ代表される。無論この外に、この中間的な見方も存在するのであつて、^④生島遼一氏などは、たしかさうした側の人であつたとおもふ。さうしてこれらの見方なり解釈なりには、みなそれぞれ相當の根據や理由があつて、全面的にその一を否認して、他を肯定するといふことは不可能である。従つてその當否はいま姑らくおくとして、ここに別個の私の考へを述べて見たい。

竹取物語がその前段の終り「御狩のみゆき」から後段「天の羽衣」に移るところに、大きい斷層のあることは、一讀して誰も氣づくことである。即ち竹取物語は後段「天の羽衣」に入るあたりから物語が一元的になつて、かぐや姫は物語の進行と共に生動して來る。しかも著しく人間的性格をもつて動いて來ることが注目される。ところでかうした超人間的超自然的な存在である神^⑤とか佛とかが人間的性格をもつて行動することは近世の西鶴の作品などには、しばしば見られるところである。そこでは神佛がその尊嚴性や絶對性を喪つて、人間と同じやうに周章狼狽したり物忘れしたり、全知全能な筈が人間のやうにお目ちがひしたりしてゐる。しかし西鶴の場合、それは所詮神の世界への人間世界の擴充であつて、近世勃興期の町人たちの烈しい人間力への信賴と自力主義の、それは一つの現はれに外ならなかつた。だから西鶴の作品に登場する神佛は、その神佛らしさや支配力を奮はれて、代りに人間的愛嬌と無力さとを與へられて、常に滑稽で明朗であつたのである。

ところが今や竹取物語において、かぐや姫が人間的であるといふことは、それとは全くちがつた意味においてであつた。人間自身の世界を神佛の世界にまでおし擴げて、そこに人間力の素晴

らしさを誇るのではなくて、人間の世界と神の世界とを對比して、むしろ人間の無力を悲傷するのである。

おのが身は、この國の人にもあらず。月の都の人なり。それをなむ昔のちぎりありけるによりてなむ。この世界にはもうできたりける。今はかへるべきになりければ、この月の十五日に、かのもとの國より迎へに人々のまうで來むす。さらすまかりぬべければ、おぼし嘆かむが悲しき事を、この春より思ひ嘆き侍るなりといひて、いみじく泣く。（天の羽衣の段）

親たちのかへりみをいささかだに仕うまつらで、まからむ道もやすくもあるまじきに、日ごろもいでゐて、今年ばかりのいとまを申しつれど、さらに許されぬによりてなむ、かく思ひ嘆き侍る。御心をのみまどはして、さきなむ事の悲しくたへがたく侍るなり。かく都の人はいとけうらに、老いをせずなむ。思ふ事もなく侍るなり。さる所へまからむするも、いみじく侍らず。老いおとろへ給へるさまを見奉らざらむ事こひしからめといひて泣く。（天の羽衣の段）

このやうに、かぐや姫が人間的であればあるほど、また人間的であらうとすればするほど、神仙女である彼女の本來性と鋭く對立し矛盾して、人間の無力さと小ささに泣くのである。所詮それは人間無力觀につながるころのものである。にも拘はらずこの場合竹取物語にあつて中世的な一種の暗さのつきまとふことがなかつたのは、思ふにそれは、人間的なもの（人間性）と對立するころのものが、源氏物語の如き或は社會的な掟（身分）とか、また肉体的制約（死）とかの、直接現實に相渉るところのものではなく、したがつて、またその圓滿な達成をそれほど強く阻むやうなものでなくて、それが神仙の世界といつた全然超自然的超人間的なものであつたところに由來する。所謂お伽噺としての傳奇性、浪漫性がさうした暗さの要素を拒否して、すべてを神秘的な美しさの中に溶かしこんでしまつたのである。とはいへ竹取物語は所詮は人間否定の、乃至人間無力觀の文學であつた。さうして「竹取物語的」といふことはこのことを指すものと考へたい。

更に竹取物語を暗さから守つたところのものとして、右のやうな理由の外に、もう一つの理由があつた。それはこの物語の前半の部分に見られる人間性の信頼とか尊重とかと、それにつながる現實肯定の精神である。後段に入つてかぐや姫が急に生動しはじめることは前述のとほりであるが、それが前半では全く冷たく靜止してゐる、といふよりむしろ無力でさへあるのである。例の五つの難題を課せられた五人の貴公子が銘々に注文の品を持參する條を見給へ。

まづ第一話（佛の御石の鉢の段）の石作皇子は、天竺へ佛の石の鉢を求めに行つた体にしてか

くれ、三年ほどたつてから大和國十市郡の山寺から古ぼけた鉢を探し出してきて、それを錦の袋に入れてもつて行く。この贋物の鑑定を、姫は「光やあると見るに、螢ばかりの光だにな」いことによつて見破るのである。第三話（火鼠の裘の段）の右大臣阿倍御主人の場合にも、「財豊かに家廣き」この人は唐の貿易商人王卿に註文して、財力によつて得た船載の逸品を自信満々、姫に持参に及ぶのであるが、姫はそれを見て、「わきて眞の皮ならむとも知らず」「火に焼かむに焼けずはこそ眞ならむと思ひて」「火の中にうちくべて焼かせ給ふに、めらめらと焼け」てしまふのである。このやうにどの場合も姫はその超人間的な存在である自らの眼力でもつて、その贋物であることを事前に看破することは出来なくて、（三寸ばかりの人が三月ほどで一人前の人に成長したといふ神仙女たる彼女の本来性をもつてすれば、それ位のことは當然可能なはずであつた）それを或は光澤の有無によつたり、または實地に火中に投じたりして眞贋を確かめて見なければならなかつた。（このことは後で、も一度觸れるはずであるが、これはやはり人間的なものへの尊重とか現實主義的な精神とかに直接結びつくはずの合理主義の一つの表はれであらう）否、それよりか第二話（蓬萊の玉の枝の段）の車持皇子の例を見給へ。彼は「心たばかりある人」だけに玉の枝をとりに出かけたと云はせて、秘密の場所で練達の工匠を雇つて制作させる。出来上つて持参するときには、旅装をととのへて旅先から直行したとのふれ込みで竹取の門を叩く。その上、蓬萊山探險譚の一席までも辯じるほどの入念さである。その氣勢にけ押されて、かぐや姫は「我はこの皇子にまけぬべしと、胸つぶれて思ひけり」とすつかり動搖してしまつてゐる。そしてその迫眞の細工に全く詐欺されて、「物も云はず頼杖をつきて、いみじう歎かしげに」果ては「親ののたまふことを、ひたぶるに否み申さむ事のいとほしさに、得がたきものをゆかしと申しつる」とほとほと後悔さへするほどの無力ぶりである。しかし皇子の失敗は、全く思ひがけない玉の枝制作に従事した工匠たちの賃金請求のための出現によるのである。危機一髪、まさに果卵の一步手前であつた。それだけに姫の喜びは如何ばかりか。「かぐや姫、暮るるまに思ひわびつる心地わらひさかえて」とあつて、喜色満面の姫の姿が髣髴するではないか。果然「嬉しき人どもなりといひて、祿いと多くとらせ」て感謝しゐる。

第四話（龍の首の珠の段）の大納言大伴御行と第五話（燕の子安貝の段）の中納言石上麻呂とは共に、註文の品を得ようと折角奮闘努力中に惜しくも失敗を喫して、夙く陣列を離れ去るのであつて、したがつて直接かぐや姫を煩はすことはない。ただ大伴御行の失敗には五人中唯一の「龍神の怒り」といふ超人間力の行使が見られる。しかしそれにしても、結局暴風雨の如き天然現象にすぎなくて、超自然的な何物でもない。ましてかぐや姫自身の神通力などといふやうなものでは勿論ありえなかつた。

かく五人の求婚者たちは悉く失敗し去るのであるけれど、にも拘はらず作者はこれを人間と人間以上のものとを對置して、そこに人間の無力や卑小さを擲揄したり、嘲笑したりしようとするのではない。否、それだけではなしに、前記事持皇子の場合などの如き、時にはかへつて人間が人間以上の存在（かぐや姫）を壓倒支配しようとするような姿勢さへ示したりするのである。それ位だから、初めに姫が五つの難題を提出した時に、例の五人の貴公子たちが「おいらかにあたりよりだにな歩きそとや宣はぬ」と云つて、うんざりして歸つたところに、作者はかうした超自然的事物の存在を否定する氣持を明瞭に示してゐたのである。かういふところにも、人間的なものへの信頼の上に立つ合理主義の尊重の反映が見られたのだといへよう。そしてこの事は上述の難題の鑑定法が光澤の有無とか、火力の援用とかすべて現實的合理的方法によるものであつたこととも合せ考へられるべきもので、そこに當然現實を重視し肯定する態度へと結びついてゆくことも容易く考へられるであらう。後段で、異様なかぐや姫の態度を召使の者から法意されて、いぶかり尋ねる翁の言葉に「なでふ心地すれば、かく物を思ひたる様にて月を見給ふぞ。うましき世に」とあつて、この世をめでたい結構な世の中だと見るところに現實肯定乃至讚美の氣持が看取出來たのである。そしてそこには、その現實の中にあつて現實を支配するものとしての人間が意識され、當然又それへの尊重、信頼の精神が根幹となつてゐることも理明であらう。本能とか感情とか人間的な力とか、つまりさうした一切の人間性への尊重である。

かの五人の貴公子たちが「物をも食はず思ひ」つめて通つて懇願しても、一向その甲斐なくて遂に「かかればこの人々家に歸りて、物を思ひ、祈りをし願を立つ。思ひやむべくもあらず」とあつて、ここには神佛の力でもどうにもならぬ人間感情（本能）の強さが示されゐるし、またさうした彼らの執拗な戀着ぶりに、閉口した翁はしきりに結婚をすすめるのであるが、それに對してかぐや姫はかう云ふのである。「世のかしこき人なりとも、深き志を知らではあひがたしとなむ思ふ」と。これは身分の高貴さなどは問題ではない、深い愛情こそが最も尊いのだとする、つまり人情絶對の想念である。

要するに以上において見てきたやうな人間性の尊重とか現實肯定の精神が竹取物語の前半において隨所に打出されてゐたことが、この作の大根が人間無力觀の文學でありながら、一向に暗さを搖曳させることのなかつた他の一半の理由と考へられるのである。さうしてこの側面に重點において竹取物語を解釈する時は前記津田博士の如き「世態小説」論が成立するのであるし、第一の理由の傳奇性浪漫性を重視すれば和辻博士の「お伽噺」論が産まれるのである。

しかしかうした人間主義は柿本人麻呂あたりに見られた素朴な上代人の人間肯定をここにも傳へたものであつたにすぎない。その點で、この作品が、源氏物語に「物語のいできはじめの祖」

と規定されてゐたやうに、上代末期につらなる、平安もまだ初頭の時期の制作にかかるものであることが考へられる。けれども、しかし時代は奈良から平安へと、もはや大きく轉移しゐる。知性の發達に伴ふ自意識の覺醒と反省とは、人間の卑小さと無力さを發見させずにはおかぬであらう。見給へ、だからこそ、地上の最高權威であり、人間力の象徴であるはずの帝の權力をもつてしても、なほ且つ、かぐや姫への愛戀を成就出来なかつたではないか。和辻博士もいはれるやうに、^⑥「現實の世界の代表者は、超自然者に完全に征服せられ」て、失意と絶望の深淵に快惱しなけりばならなかつた。竹取物語とは、まさにさうしたところに由來する絶望と悲傷の文學であつた。人間無力觀の作品であつた。本能とか感情とか人間的な力とか、さういふ一切の人間性の尊重は竹取物語の前半において、たしかに打出されてゐて、なるほど、この作品を組立ててゐる要素の一つではあつたが、それは、それほど尊重すべき、信賴すべき人間の力でも。結局は小さい限りあるものであり、無力なものにすぎないことを描いた作品であり、さういふ人間性と對立して、その達成を阻害するものとして、かぐや姫といふ超自然的超人間的な神仙女を拉し來つたのであつた。その意味からすれば、津田博士の云はれる通り、^⑦「其の女主人公は多くの求婚者の心を迷はせ、最後に盡くそれを失望させる要件が具つてゐる女であればよいので、必ずしもそれを天上の仙女にしなけりばならぬ必要はな」かつたかも知れない。しかしそれが、かぐや姫の如き神仙女であつたからして、また上記の二要素の鋭い對立や相剋もなく、（否、しようもなかつたのだ）したがつて、深刻な悲劇も展開することなく、現在われわれの見るやうな浪漫的な一篇のお伽噺的竹取物語が成立することにもなつたのであらう。（特にこのやうな神仙女を必要とした理由には、^⑧「小説の初期に於いては、まだ多少讀者にをかしみと珍らしさを與へねばならなかつた」といふこの作品の成立年代における歴史的社會的發展段階を當然考慮に入れなければならないが。）

竹取物語をかうした人間性と對立して、その達成を阻むものの側に比重をおいて、人間無力觀の文學と考へ、またさうしたものとして「竹取物語的なもの」を意味するとき、在原業平に比定される人物を中心とする人間愛慾生活の種々相を描いた伊勢物語は、當然人間中心の感情なり本能主義の文學であることにならうし、したがつて、また「伊勢物語的なもの」とはさうした人間中心、人情尊重の考へ方に強く傾斜するところのものを意味することとなるであらう。

「竹取伊勢」の並稱が、傳奇的物語と歌物語とのそれぞれ物語文學の二大系統を示す原初的型態の意味において、從來行はれてきたことは本論の最初に述べたとほりであるが、いま又右のやうな意味においてもこれらの二つの作品はたがひに對稱的な存在としての性格を示してゐることは注意されていいと思ふ。そしてかうした二重の意味をもつて、「竹取物語的なもの」と「伊勢

物語的なもの」とが統一融合されるところに源氏物語が成立することは周知のとおりである。源氏物語の桐壺帝において示されたあの強い人間本能、乃至感情生活は、すなはち「伊勢物語的なもの」の要素の提示であらう。身分の上下など無視して、専ら自己の眞實に生きようとする帝の本能性の追求は、人間性の尊重の力強い示現に外ならない。竹取物語の前半にもさうしたものは一應打出されてゐるにはゐたけれど、それがあの作品の重要なモチーフではなかつたことは既に述べたとおりである。本能とか感情とか、さういふ人間性を、より強く正面に押出して、そこに作品のモチーフをおいてゐたのは、やはり伊勢物語の方であつた。

ところが一方さうした人間性と對立するところのものを重視して、それが前者を壓倒する姿——人間無力觀——を描いた竹取物語的要素は、源氏物語においてはもはやその原初的形態のもつ單純性から離脱して、平安中期の歴史的社會的段階の作品としてふさはしい複雑さにまで成長してゐた。すなはち竹取物語のかぐや姫はその神仙女といふ超自然的超人間的位位置から現實の地上的人間にまでひき下されて、^⑧「いとやむごとなき際にはあらぬ」ところの身分的社會的制約と^⑨「いとあつしくなりゆき、物心細げに里がちなるを」、^⑩遂には「絶え果て給ひぬる」ごとき肉体的制約とをおはされた桐壺更衣におき代へられてゐる。竹取物語にあつて、架空的な超人間力（かぐや姫）として表現されてゐた「人間性」への對立物は、かうして源氏物語では現實的なもの（桐壺更衣）となつて、前者との對立と相剋とは、それだけ複雑化されて、そこに不調和の循環する世界を現出する物語となつて行つたのである。したがつて竹取物語では一應拒否されてゐた暗さを、源氏物語では色濃く搖曳させる結果にもなつて、そのことがやがて所謂「もののあはれ」の追求に結びついて行くのだと、かういふ風に考へられるのではないか。^⑪池田龜鑑博士が竹取物語において、源氏物語の「もののあはれ」への發展的なものを見て居られたのも、かうした意味において首肯されると思ふ。そしてこの源氏物語の「もののあはれ」への發展的なものが、すで竹取物語において見得たといふところに、かの「繪合」の卷において源氏の作者が、特に竹取物語を——伊勢物語ではなくて——「物語のいできはじめの祖」といつたことの意味も考へられるのではないか。

要するに、人間無力觀の文學として見た竹取物語の悲劇性は専ら肉体的契機によつて捉へられてゐて、社會的契機は未だ見られなかつた。人間性との矛盾、對立、葛藤は肉体の面においてのみ描かれてゐるところに、そして社會的掟とは無關係であるところに、この物語の素朴性即ち物語としての原初的性格が考へられるのであつて、それが源氏物語になるとむしろ後者——社會的制約——との契機に重點がおかれるやうになつてゐて、そこに竹取からの、物語としての發展展開が見られるのである。

以上、竹取物語を「世態小説」と見る津田博士のやうな解釈と、「お伽噺」と考へる和辻博士のやうな見方とは、別個にここに人間無力觀の文學を考へて見た次第である。

- ① 高木市之助氏「物語の歴史」（改造社版日本文學講座4）13頁。
- ② 津田左右吉博士「文學に現はれたる我が國民思想の研究」（貴族文學の時代）262頁。
改訂版によると、このところは「この物語の中心觀念が、戀にうき身をやつす當時の大宮人を描くところにある、その意味で寫實小説であることは、一讀して直に感じ得られるところである。」とある。
改定版323頁。
- ③ 和辻哲郎博士「日本精神史研究」——お伽噺としての竹取物語 132頁。
- ④ 生島遼一氏「日本の小説」——竹取物語の美しさ。
- ⑤ 西鶴「日本永代藏」卷二——天狗は家名の風車、全卷四——祈るしるしの神の折敷、「世間胸算用」卷三——神さへお目ちがひ、「好色五人女」卷一——姿姫路清十郎物語、全卷三——中段に見る曆屋物語、参照。
- ⑥ 前記「日本精神史研究」143頁。
- ⑦ 前記「文學に現はれたる我が國民思想の研究」262頁。
- ⑧ 前記「文學に表はれたる我が國民思想の研究」269頁。
- ⑨ ⑩ ⑪ 源氏物語桐壺卷参照。
- ⑪ 池田龜鑑博士「概説日本文學史」41頁。